詩というエクリチュールの舞台の上で、彼女は大きく翼を広げていく。

ALL SORTS OF WOMEN.
京都にはいろんな女がいる

現代詩集『娘十八習いごと』の著者、園田恵子さん。彼女のプロフィールは少々風変わり。1964年、京都に生まれ、帝塚山学院大学文学部日本文学科を卒業。その後、もう一度同大学美学美術史学科を志すが、訳あって中退。1986年夏、1泊2日の予定で東京へ。しかし、予定は未定、そのまま住み着くことになる。夜明け前の街を猫と歩くこと、闇夜、星月夜、月下の庭、坂の多い町、道に迷うこと、フランク・キャプラの映画……を好む。「現代詩手帖」「現代詩ラ・メール」（思潮社刊）他、女性誌に詩やエッセイを執筆。1987年11月に、処女詩集『娘十八習いごと』を思潮社より刊行。

この詩集は初版が売り切れて、現在増版中という。園田さんの人柄は、彼女の詩を実際に目にしていただけると分かるだろう。では、ここで、彼女の詩をほんの一部分だが紹介してみよう。

逢うとあ、めから絡まれて裾のの方
いやだわ深みに落ちる
言葉あざやかな季節の雨はいきものの匂い
伏目にくぐもってよこしまな気配
しっぽり絡んでくる湿り
の湿り具合は著しく淫らですが
馴染んでみたい
このように裾濡らして立っていると
よそめにも訳あり気に見えるでしょう
（「雨の匂いが強くなる」より）

お花を拝見するときは　ためつ　すがめつ
見ないようにいたします　たとえ心に違う
生け方のありましてもなんとなきように見
るのでございます　これこのように　なん
となきように
（「娘十八習いごと」より）

この2編を見ていただけると彼女の世界が一目に瞭然となると思うのだが……。京都に生まれ育ったという彼女の、ごく自然に身に付いたと思われる〝習いごと〟が、詩の基本であり、彼女自身の基本であるといってもいいだろう。彼女自身の言葉にも「わたしは京都に育ったせいか、ときどき東京のコンクリート・ジャングルや人ゴミの慌ただしさが、とても息苦しくなる」と、京都という街が与えた影響を強く物語っている。

「現代詩」、中でも「女性誌」というタームにおいて、新しい波を起こしそうな園田恵子さん。京都っ子としては、ぜひとも注目したい、そんな女性の一人である。

おにぎりが美味い店の主。

昨年12月19日、四条烏丸東におにぎりカフェ日本一がオープンした。オーナーは、森田由美さん。25歳。♀。彼女もやはり、時代を騒がす一人である。

近頃、お米が見直されてきている。パンよりもご飯の方がダイエット効果があるとか、アイスクリームやフルーツをのせた一口おにぎりがかわいいと女の子に評判だったりと、なかなかの人気なのである。そのおにぎりに着目したのが、森田由美さんである。彼女は東北の知り合いから、米の話を聞き、お酒落なおにぎり屋さんをしようと決めた。しかし、おにぎり屋さんだけでなく何かをプラスした店はと考え、おにぎりカフェに至ったのである。

店内は今までのお米を扱う店と違いグレーと黒で所々に朱がある和風モダン調で統一されていて、クアーズのプレートやダーツ、マリオネットが由美さんの感性をうまくひき出している。そして極めつけは由美さん自慢のＶＩＰルーム。扉があるわけでもないし、チャージが高くなるわけでもないが、落ちついて食べたり飲んだりできる空間が作られている。 10:00PMからはバーとして、しっかりしたお酒も飲める店になる。天むす食べながらジンを飲んでいただきたい?!

由美さん曰く、「とりあえず一度来て下さい。店のことも私のことも、わかってもらえると思いますよ。」何事も百聞は一見に如かずというわけである。